

長寿祝

JJ1SXA/池

TWO-FORTY誌第117号の発行は、12月3日(2023年)で第41回忘年会の開催日だ、まあ、TWO-FORTY誌も忘年会も横に置いて、その日から53日後は、当たり前のことだが2024年1月25日だ。

この日は、私がこの世に生を受けて88年目の日にあたる、88歳の誕生日だ、後50数日、人間生身の身体、何があるか分からないが、普通なら生き永らえそうだが、そうです、いよいよ「米寿」だ。

ご存知の通り、「還暦60歳」、「古希70歳」、「喜寿77歳」、「傘寿80歳」等の長寿祝を通過してきたのだ、随分長生きしたものだ、既に。弟2人、妹1人を亡くし、数多くの240の仲間を天国に送った、天上界から何をモタモタしている早く来いよの声も聞こえてくるが、まだまだ、こちらで楽しみましようとの皆様の声の方が大きいような気がする、気がするだけで、本当のところはどうなんだろう？

世は、人生100年時代と言われ、日本の100歳以上の人口は、10万人に迫っている、その姿は「理想の老後像」と言われ、1990年代の日本において国民的な人気を誇った双子姉妹の「きんさん」「ぎんさん」の時代から30数年、日本は長寿大国になった。

これでは、「卒寿90歳」、「白寿99歳」、「紀寿または百寿100歳」のお祝いどころか、「茶寿108歳」、「皇寿111歳」、「大還暦120歳」のお祝いをする人も珍しく無くなるのか？

敬老の日というのがありますが、2002年までは9月15日でしたが、2003年から、9月の第3月曜日となり、敬老の日は年ごとに変わります。

敬老と言いますが、何歳以上が対象なのでしょう、その昔は「還暦60歳」が一つの節目だったのでしょうが、今や、60歳はまだバリバリの現役世代だ。

老人とは、老人福祉法で第五条の四に「六十五歳以上の者(六十五歳未満の者であつて特に必要があると認められるものを含む。)」となっている。

高齢者とは、一般的に65歳以上の方をいい、65歳以上75歳未満の方を「前期高齢者」、75歳以上の方を「後期高齢者」といいますとなっている。

第2次世界大戦後のベビーブームで誕生の、いわゆる、団塊の世代も、後期高齢者の仲間入りを始めた、少子高齢化の波は、老人にやさしい世界では無い。

さて、前に戻って、「米寿」の次は「卒寿90歳」だ、私も、ひょっとしたらそこまで生きるかも知れないが、その次の「白寿99歳」は、はるか彼方、そこまで生きることは望まない、「卒寿」くらいで早く卒業したい。

佐藤愛子女史が93歳の時「何がめでたい」という本を出版しベストセラーとなったが、間もなく100歳と聞く、益々お元気のようなだ。

本を読ませてもらった時、私は90歳はずっと先のことだったが、「何がめでたい」の言葉に変に同感したのを思い出し、そして今、限りなくその歳に近づき、益々実感する、そう、「何がめでたい」だと。

女史の直木賞受賞作「戦いすんで日が暮れて」は46歳の時の作品だが、「戦いやまず日が暮れて」は、2021年98歳の時の作品だ、本当に頭が下る、とても真似はできないが、私も今しばらくはボケないで過ごしたいものだが…(笑) (2023年10月記)